

# 「3世代が輪になって」暮らせるまちへ

4月17日に執行された近江八幡市長選挙で、小西理市長が再選しました。2期目のスタートを切った小西市長に、公約に掲げた7つの項目に沿い、今後のまちづくりへの思いをお聞きました。



近江八幡市長 小西理

聞き手／近江八幡市広報番組「テレはち」キャスター 片山むつみ

——まず、市民の皆さんにごあいさつをお願いします。  
市長 また皆さんに信任いただくことができました。これまでの4年間の経験をもとに、「3世代が輪になって暮らす」「市民が主役」という理念に基づき、一生懸命頑張ってまいります。よろしくお願いたします。

——公約には、これまでの4年間の取り組みに加え、さまざまな重点施策を挙げていますが、まず、1番に掲げる「近江八幡市が発展していくために」「どのようなことに取り組んでいきますか。」

市長 公約には7つの項目を挙げていて、その1番目がこの項目です。やはり、高齢者と働く世代と子どもたちの3世代が、1つの地域で一緒に暮らし続けていけるということが、1番根っこになる重要な考え方・理念だと思っています。私も若い頃に上京して、両親が高齢になってから地元に戻ってきましたが、その時に、暮らしていくうえで、さまざまな課題に直面しました。若い世代が都会に出なくても、地元で魅力的な仕事があり、誇りを持って収入を得られるような仕事を作っていくかといけません。「小さな庁舎、大きな福祉」といつも言っています。経済が回らないと福祉は回らないので、この部分をまず1番に挙げました。

今後、若い世代が本市に残り、魅力的な仕事を創出するうえで、市の基幹産業として育てていくものの1つに農業があります。津田干拓地の果樹園地にこれから8人の若者が入植する予定ですが、ブドウを育ててワインを作ろうとしている人もいます。農業の6次産業化などを含めて、これまでと違った形で発展していくことができばと思っています。あと、近江牛も若い世代が継いでいってくれていますよね。農業はグリーン化にもつながりますし、今後、大きな分野に発展させなければならぬし、していくだろうと思っています。

また、本市にはいわゆる「原野」がないです。だから農地が多くなっています。大規模な工場を誘致することは非常に難しいのですが、本市には、安土城跡や八幡山城跡、近江商人の築いた伝統文化があり、本市の名誉市民第1号であるウィリアム・メレル・ヴォーリズが遺した偉大な功績など豊かな伝統文化や自然があります。観光を含め、さまざまなものをうまく生かしながら情報を発信し、1つの産業にまで高めていきたいと思っています。他にも、これからの滋賀の産業を支え、工業系の高等専門人材の育成を図るため、県立高等専門学校の本市への誘致にも取り組んでいきます。学びの基礎であるIT分野は、例えば、自動車の価格全体の約3割はソフトウェアの価格であるといわれているように、皆さんの目に見えているよりもはるかに大きな産業分野として確立しています。さらに、新型コロナウイルスのmRNAワクチンなど、最先端のバイオ、メディカル分野などもこれから重要な分野です。このよ

(4ページに続く)

# 7つの公約

- ① 近江八幡市が発展していくために
- ② こどもたちと楽しく輪になって暮らすために
- ③ 高齢者が生きがいをもって負担なく暮らすために
- ④ 災害や不測の事態に備えるために
- ⑤ 私たちの社会がこのままあり続けるために
- ⑥ ウイズコロナの社会に向けて
- ⑦ 安土地域の未来に向けて



うな中で、研究機関などを核に誘致することで、若い世代の働く場をしっかりと作っていきなと思っています。

——これまで、中学校卒業までの子どもを対象とした通院医療費の無償化や、移動図書館車の導入など、さまざまな教育・子育て支援に取り組んできましたが、今後どのような取り組みをお考えですか。

**市長** これには2つの大きな柱があります。1つはやはり保護者の経済的負担を減らすことです。子育てが保護者にとってできるだけ経済的な負担にならないよう、通院医療費の無償化を高校生ま

で拡大していきます。併せて、段階的にではありますが、小・中学校の給食費を第2子半額、第3子以降を無償にしていきます。

もう1つは、これまでの4年間で感じてきた人間の「心」の部分を大切にしていきたいことです。今は保護者が子育てをするのにすごく孤立しがちです。社会が核家族化して、地域が段々と分断されていっていると感じています。保護者同士の出会い、ふれあう機会をつくり、どのように結びつけていくのかという部分のサポートをしていきたいと思っています。

す。当初予期していませんでしたが、移動図書館車がそういうものの1つとして機能している話も聞いています。この分野でも、さまざまなことに取り組みながら、保護者同士の気軽なネットワーキングをきっちりやっていきたいと思っています。

——高齢者福祉についてお聞かせください。

**市長** 今後、後期高齢者になる団塊の世代が増加していく中で、運転免許証の返納などさまざまな課題があり、この分野は待ったなしだなと感じています。「移動の支援」「居場所づくり」「医療体制の

## PROFILE プロフィール

### 近江八幡市長 小西 理

昭和33年、武佐町生まれ。  
 東京大学法学部卒業。民間企業勤務の後、平成12年9月から実兄の小西哲元衆議院議員秘書、平成13年10月から衆議院議員(2期)を務めた。  
 平成30年4月から近江八幡市長。

確立」の3つがキーワードです。健康医療の相談をはじめ、さまざまな相談を含めケアもできるよう、地域包括支援センターが担う機能と医療体制を充実させていきたいと思っています。

——防災減災対策についてお聞かせください。

**市長** この分野は言うに及ばずです。治山治水、道路インフラの整備、通学路の安全確保など、不安のない暮らしは幸せの前提となっています。市と国・県で力を合わせながらしっかりとした整備をしていきます。

——昨年7月に「近江八幡市気候非常事態宣言」を出されるなど、これまでも持続可能な社会に向けて取り組んできましたが、今後の取り組みについてお聞かせください。

**市長** 公約に「私たちの社会がこのままあり続けるために」という項目があり、この中の1つがCO2の削減です。これを、本市だけではなく全世界的な社会テーマとして、言葉だけではなく、しっかりと取り組んでいこうと思っています。いわゆる省エネ、再生エネルギー開発、カーボン・オフセット(買入れ)を併せて計画を立てながら実行していきます。この部分には、他にも行政のデジタル化や市民参加の仕組み、

マイノリティや障がい児者の社会参加など、さまざまなテーマが将来的に関わってきます。障がい児者が心に負担なく暮らせる社会は、高齢者をはじめ誰もが負担なく暮らせる社会になるだろうと思います。遠い先を見た話ですが、地道に取り組んでいきたいと思っています。

——コロナ禍が続き、経済活動や市民活動にも影響が出ていますが、コロナ対策についてお聞かせください。

**市長** これまでも、ワクチン接種をはじめ、経済活動再開に向けさまざまなことを行政として対応してきましたが、実はすごく大きな課題があります。それは、現代のように交通網が発達した社会では、将来的に新型コロナウイルスの流行と同じような現象が起こり得るだろうということです。かつてスペイン風邪や新型インフルエンザが流行したように、これは現代社会の抱える1つの大きなリスクだと思っています。これに対する危機管理をどのように社会のしくみとして織り込んでいくのか、今回を1つの教訓として生かしていくことが大切です。本市では既に避難所にパーティションを備えていますし、マスクも備蓄しています。このようなことをきっちりやっていくことが大事です。テレワークの仕組み・インフラの整備など、将来同じようなことが起こったときに、経済的な影響を少なくしながら、いかにスムーズに対応できるかという体制を考えていきたいと思っています。

——今後の安土地域についての取り組みをお話ください。

**市長** 旧近江八幡市域と安土地域では、それぞれで人口規模が違いますが、かたや八幡堀や八幡山城跡を有し、かたや安土城跡という大きな資産を有しています。私はいつもこれらを「車の両輪」と表現しており、近江八幡市の1つの大きな核になっていると思います。しかし、将来的な活用の方向性が見えづらいのが現状です。このような中で、県道2号線バイパスの整備構想がありますし、点在する安土城跡とその周辺の観光スポットをどのように結び付けていくか。私は「自転車」がキーワードだと思っていますが、安土という街全体の将来像を描くグランドデザインをしっかりと作り上げることが大事だと思っています。

※この特集記事は、ZTVで5月29日～6月4日に放送する市広報番組「テレはち」の内容を基に編集しています。



初登庁で市職員や市議会議員らに拍手で迎えられ、職員から花束を受け取る小西市長(4月25日)

りとした整備をしていきます。

——昨年7月に「近江八幡市気候非常事態宣言」を出されるなど、これまでも持続可能な社会に向けて取り組んできましたが、今後の取り組みについてお聞かせください。

**市長** 公約に「私たちの社会がこのままあり続けるために」という項目があり、この中の1つがCO2の削減です。これを、本市だけではなく全世界的な社会テーマとして、言葉だけではなく、しっかりと取り組んでいこうと思っています。いわゆる省エネ、再生エネルギー開発、カーボン・オフセット(買入れ)を併せて計画を立てながら実行していきます。この部分には、他にも行政のデジタル化や市民参加の仕組み、

マイノリティや障がい児者の社会参加など、さまざまなテーマが将来的に関わってきます。障がい児者が心に負担なく暮らせる社会は、高齢者をはじめ誰もが負担なく暮らせる社会になるだろうと思います。遠い先を見た話ですが、地道に取り組んでいきたいと思っています。

——コロナ禍が続き、経済活動や市民活動にも影響が出ていますが、コロナ対策についてお聞かせください。

**市長** これまでも、ワクチン接種をはじめ、経済活動再開に向けさまざまなことを行政として対応してきましたが、実はすごく大きな課題があります。それは、現代のように交通網が発達した社会では、将来的に新型コロナウイルスの流行と同じような現象が起こり得るだろうということです。かつてスペイン風邪や新型インフルエンザが流行したように、これは現代社会の抱える1つの大きなリスクだと思っています。これに対する危機管理をどのように社会のしくみとして織り込んでいくのか、今回を1つの教訓として生かしていくことが大切です。本市では既に避難所にパーティションを備えていますし、マスクも備蓄しています。このようなことをきっちりやっていくことが大事です。テレワークの仕組み・インフラの整備など、将来同じようなことが起こったときに、経済的な影響を少なくしながら、いかにスムーズに対応できるかという体制を考えていきたいと思っています。

——今後の安土地域についての取り組みをお話ください。

**市長** 旧近江八幡市域と安土地域では、それぞれで人口規模が違いますが、かたや八幡堀や八幡山城跡を有し、かたや安土城跡という大きな資産を有しています。私はいつもこれらを「車の両輪」と表現しており、近江八幡市の1つの大きな核になっていると思います。しかし、将来的な活用の方向性が見えづらいのが現状です。このような中で、県道2号線バイパスの整備構想がありますし、点在する安土城跡とその周辺の観光スポットをどのように結び付けていくか。私は「自転車」がキーワードだと思っていますが、安土という街全体の将来像を描くグランドデザインをしっかりと作り上げることが大事だと思っています。

——最後に、「コロナ禍が続く中で市民の皆さんへのメッセージをお願いします。

**市長** 長引くコロナ禍で、皆さんの生活も厳しい部分があると思いますが、皆さんの笑顔と明るい未来を信じて挑戦をしていきたいと思っています。また、私は「市民が主役」そして「協働の社会」という形で、力を合わせながら、お互いに足りないところを補い合い、良いところを伸ばし合うという、そんな社会ができればいいなと思っています。引き続き、共々い近江八幡市をつかっていきたいと思っていますので、よろしくお願いたします。